

能

佐渡島には **36** 棟の能舞台があります。これは日本にある能舞台の **3 分の 1** に相当し、このように小さな島では異例の数です。とはいえ、江戸時代（**1603～1868**）における佐渡での能の最盛期には、島内には約 **200** 棟の能舞台がありました。それに比べれば、はるかに少ないものです。能を佐渡へと紹介したのは、**1434** 年に流刑により流されてきた世阿弥元清（**1363～1443**）でした。世阿弥は有名な役者であり、脚本家でもあり、能の大成者と見なされていた人物でした。

能の人气が高まったのは、大久保長安（**1545～1613**）が佐渡奉行に任じられた **1600** 年代初期でした。島の豊かな金鉱と銀鉱を監督する任務を負ってきた大久保は、自らが愛する能を佐渡へ、そして急速に人口を増していた主要な鉱山地区の一つ、相川へと持ち込みました。この芸能は、鉱山で働く人々や農民たち全員にとっての娯楽となりました。長い労働の **1** 日を終わると、人々は舞台を建てたり、衣装を縫ったりすることで、能や歌舞伎の世界に逃避したのです。江戸時代の終わり頃になると、佐渡での能は鉱業と同じく衰退を始めました。ですが日本の他の地域で起こった芸術の急激な衰退に比べれば、比較的堅調が維持されていました。佐渡の能には、本州で見られたような侍階級の独占やそれへの関連性はありませんでした。そのために、武士が支配した徳川時代が **1867** 年に終わった後も、存続することができたのです。能は、佐渡の商人や農民の領域に残りました。彼らによって地域の慣習や宗教上のしきたりが組み込まれた能が、地元神社で定期的に上演されました。

近年、能は **4** 月から **10** 月に神社の野外舞台で上演されており、最も忙しくなるのは **6** 月です。このスケジュールは、かつて必要に迫られたものでした。江戸時代には一般の人々によって主に行なわれた佐渡における能は、舞台が農期と被ってしまうからです。佐渡流の能の公演は、比較的控え目で親密な雰囲気の中、開催されます。観客は地面に座り、神社の外でかがり火に照らされる舞台を観ます。初めて訪れる人は、**4** つの主な舞台で定例能が行われる、国仲地域から始めるとよいかもしれません。